

中東地域の日本語教師たちの感じる困難

小熊 利江

1. はじめに

海外での日本語教育は、日本とは多くの面で異なることが予想される。国際交流基金による『海外の日本語教育の現状』(2005)の調査などで状況が報告されているが、中東地域¹については「中東・アフリカ」地域として一括りにされている。また、中東地域からは情報発信されることも少なく、これまで実情がほとんど知られてこなかった。

中東地域では日本語の社会的需要が小さく、日本語教育はまだ小規模な分野である。日本語教育機関のある国は15カ国、うち国際交流基金やJICAによって日本語教師が派遣されている国は8カ国である。他に、現地に定住している日本人やノン・ネイティブの教師がいるが、日本語教師になるための研修を受けていない教師や経験の浅い教師も多く²、また有益なリソースにアクセスできない地域もある。

2. 中東日本語教育セミナー

2.1 中東日本語教師連絡会

日本語教育環境が整っていない地域で日本語を教える教師と学習者を支援する目的で、1999年に中東日本語教師連絡会が発足した。本発表の資料を集めた2003年の時点では10カ国の参加があった。

中東日本語教師連絡会によって2001年から毎年、中東日本語教育セミナーがエジプトにて開催されて

いる。セミナーは、中東各地の日本語教育関係者が集まり研修を受けることを主な目的としている。

2.2 2003年のセミナー内容

2003年9月には2日間の日程で、中東日本語教育セミナーが開催された(表1)。この年は「困難な状況における日本語教育」というテーマが設定され、教師たちが中東地域で日本語教育を行う上で困難を感じている点について意見交換を行った。

2.3 2003年のセミナー参加者

日本語教師としては8か国から17機関、37名が参加した。会場となったエジプトからの参加者が最も多く全体の3分の2を占めた。セミナーの参加者および所属機関について詳しい情報を表2に示す。

3. 本発表の目的

2003年の中東日本語教育セミナーの内容をもとに、中東地域における日本語教育の現状と課題に関する情報の発信を主な目的とする。日本語教育上の困難について教師の意見を中心に報告し、個々の問題を具体的に示す。

さまざまな地域の現状を知ることによって、日本語教師研修などにも多くの示唆を与えることができると考える。

4. 分析データ

本発表で用いるデータは2種類ある。中東日本語教育セミナーの前に教師から提出されたレポートと、セミナー当日の討論内容である。

中東各地の日本語教師に、事前にレポートの提出が依頼された。内容は自国内の日本語教育事情および所属機関の紹介と、日頃感じている日本語教育上の困難点についての報告である。セミナーでは、レポートが資料として参加者に配布され、「困難な状況」について各地域の具体的な問題をふまえた上で討論が行われた。

表1 中東日本語教育セミナー2003のプログラム

1 日 目	09:00-09:15	オープニング
	09:15-10:15	講演1「困難な状況における日本語教育 その1」
	10:30-13:00	講演2「「境界」における日本語教育の現状と展望」 (昼食)
	14:00-16:00	各地域の報告と討論1
2 日 目	09:00-12:00	各地域の報告と討論2 (昼食)
	12:00-13:00	
	13:00-16:00	講演3「困難な状況における日本語教育 その2」と討論

表2 中東日本語教育セミナー2003の参加者

所属機関名	国	教育段階	日本語講座の種別	レポート提出	参加者数と国籍
アインシャムス大学	エジプト	大学	専攻	あり	5名(日本人)
カイロ大学	エジプト	大学	専攻	なし	4名(エジプト人)
アレキサンドリア大学	エジプト	大学	選択外国語	あり	2名(日本人)
セッタ・オクトーバー観光学園大学	エジプト	大学	選択外国語	なし	1名(日本人)
ヘルワーン大学	エジプト	大学	課外授業	あり	2名(日本人)
エジプト日本語教育振興会	エジプト	社会教育	公開講座	なし	6名(日本人) 3名(エジプト人)
国際交流基金カイロ事務所	エジプト	社会教育	公開講座	なし	2名(日本人)
—	エジプト	—	個人教授	なし	1名(日本人)
ダマスカス大学	シリア	大学	専攻 公開講座	あり	2名(日本人)
アレppo大学	シリア	大学	選択外国語 公開講座	あり	2名(日本人)
チャナッカレ3月18日大学	トルコ	大学	専攻	あり	1名(日本人)
アナドル商業高校	トルコ	高校	選択外国語	あり	1名(日本人)
クウェート大学	クウェート	大学	公開講座	なし	1名(日本人)
キングサウド大学	サウジアラビア	大学	専攻	なし	1名(日本人)
チュニス外国語大学	チュニジア	大学	選択外国語	あり	1名(日本人)
バハレーン大学	バハレーン	大学	選択外国語	あり	1名(日本人)
教育省市民講座		社会教育	公開講座	あり	
モハメド五世大学	モロッコ	大学	選択外国語 公開講座	あり	1名(日本人)
JICA エジプト事務所(非教師)	エジプト	—	—	—	1名(日本人)
JICA シリア事務所(非教師)	シリア	—	—	—	1名(日本人)
東京外国語大学(アラビア語教師)	日本	大学	—	—	1名(日本人)

5. 事前のレポート

5.1 中東地域の日本語教師が感じる困難

レポートから日本語教育上の困難点に関する記述部分を抜き出し、要点をまとめて表3に示す。尚、レポートを提出したのは日本人のみであったため、20項目の意見は全て日本人教師からのものである。

多くの国で指摘された「(1)授業時間数が少ない」「(2)教師の不足」「(3)学習者の動機付けが低い」は、中東地域に共通した問題であると認められる。

「(1)授業時間数が少ない」問題については原因として、日本語が選択科目の場合に時間割の決まるのが後回しにされること、専攻科目の場合も実際に授業が始まる時期が遅れることなど、大学側の不手際によるものが3件挙げられた。また、イスラム教の断食月には約1ヶ月間の短縮授業となること、教師も学生も断食しているため学習が捗らないことから実質的な学習時間がさらに短くなると指摘された。

「(2)教師の不足」に関する意見では、現地語を話す日本語教師の不在についても5件、触れられていた。日本人教師の語学力不足のため所属する教育機関との事務連絡や教材作成に支障をきたす、学習

者が教師に不満を伝えられずストレスを感じているという意見もあった。

「(3)学習者の動機付けが低い」に関しては、国内に日本語を活かした就職口が少ないことが理由として挙げられていた。学生はテストの点数が悪かったために日本語学科に入学し、日本語にあまり関心がないという機関もあった。

セミナーでは、これらをふまえて参加者が討論を行い、(1)から(20)の問題が自国でも起こりうる、あるいは状況が理解できると認識された。

5.2 困難点の分類

20項目の問題点を、『海外の日本語教育の現状』(2005)における「日本語教育上の問題点」と同様5つのカテゴリー「(a)リソース関連」「(b)設備関連」「(c)学習者関連」「(d)教師関連」「(e)その他」に分類し整理する。

その結果レポートの意見は、(a)に2件、(b)に2件、(c)に14件、(d)に12件、(e)に8件が当てはまる結果となった。したがって、中東地域での問題は「(c)学習者関連」と「(d)教師関連」のものが特に多いとすることができる。

表 3 困難の種類

指摘数	問 題	指摘した機関数と国名
6 件	(1)授業時間数が少ない	エジプト 2、シリア 1、チュニジア 1、バハレーン 1、モロッコ 1
5 件	(2)教師の不足	シリア 3、サウジアラビア 1、モロッコ 1
4 件	(3)学習者の動機付けが低い	シリア 1、トルコ 2、サウジアラビア 1
3 件	(4)学習者が日本語に接する機会が少ない	シリア 2、トルコ 1
2 件	(5)教材の不足	エジプト 1、トルコ 1
	(6)教室など施設が不十分	エジプト 1、チュニジア 1
	(7)学習者が日本語学習を軽視する時期がある	エジプト 1、シリア 1
	(8)教師が 2 年前後で交替するので、カリキュラムや教材の継続性が低い	トルコ 2
1 件	(9)教育機関による教師採用の条件が悪い	トルコ 1
	(10)日本語教育に対する大学側の態度が消極的	エジプト 1
	(11)大学の設定するカリキュラムがよくない	サウジアラビア 1
	(12)学習者の学力レベルが低い	トルコ 1
	(13)学習者の態度が悪い	トルコ 1
	(14)学習者の学習意欲が低い	チュニジア 1
	(15)学習者が成績に神経質になりすぎる	バハレーン 1
	(16)教師の能力不足	シリア 1
	(17)日本人教師が現地人教師と関わりを持たない	エジプト 1
	(18)教師は専門日本語の勉強が必要	エジプト 1
	(19)教師に異文化生活ストレスがある	シリア 1
	(20)学習者が集まらず初級レベルしか開講できない	バハレーン 1

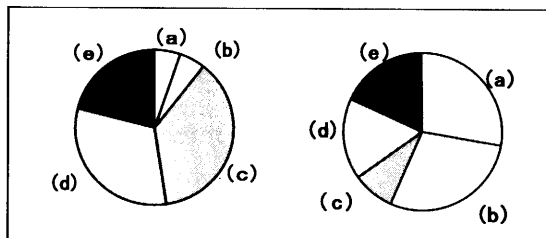


図 1 左：レポート、右：『海外の日本語教育の現状』²

5.3 結果の対照

一方、『海外の日本語教育の現状』における「中東・アフリカ」地域では「(a)リソース関連」と「(b)設備関連」の問題が多く指摘されており、レポートの意見とは異なっている(図1)。

この相違の原因として、まず調査の主体が異なることが考えられる。レポートで「(a)リソース関連」と「(b)設備関連」の問題の指摘が少なかったのは、セミナーが中東の教師対象のため、それらが不十分なことは共通認識として予め教師に考慮されていた可能性が考えられる。また、教師がセミナーで取り上げたい話題をレポートに記した可能性もある。それに対して、日本の国際交流基金からの調査には「(a)リソース関連」や「(b)設備関連」の窮状を訴える教育機関が多かったのかもしれない。

また、調査対象地域による違いも考えられる。

レポートは中東地域の教師の意見だが、『海外の日本語教育の現状』はアフリカ・中東地域の意見である。

さらに、意見の収集方法による差異の可能性もある。レポートは自由記述であるのに対し、『海外の日本語教育の現状』は選択回答式のアンケート調査である。自由記述の場合には多様な回答が得られ、より現地の実情に迫ることができると考えられる。

このように、調査の主体や方法の違いなどによって異なる結果が現れた。地域の実情は複数の異なった調査を通してより明確に把握されると言えよう。

6. セミナー討論

セミナー討論では、新たに 6 項目の問題点が挙げられた。「(21)自国内の日本語教育機関の授業内容について相互把握が欠けている」「(22)日本文化を教えることが宗教的にそぐわないことがある」「(23)中東地域特有の学習スタイルがあり、日本人教師は異なる学習スタイルを知り適応する必要がある」「(24)日本からの協力や援助が足りない」「(25)国際交流基金や JICA など教師派遣機関に現場の声が届いていない」「(26)政治情勢によって対日感情の良し悪しがあり日本語学習に影響する」。

(22)に関しては、中東で信者の多いイスラム教

に関する知識が足りないと、学生に不愉快な思いをさせたり、社会的なルールに違反したりすると述べられた。サウジアラビアなどの国では女性が肌を露出してはいけないなどの制約があり、一般の教材が使用しにくく、授業に相応しい写真やビデオ教材、授業活動を選ぶ判断が難しいことが挙げられた。

(23)の学習スタイルとしては、イスラム教徒は経典コーランを暗記すべきだとの考えに関連して学習者が暗記学習に慣れていること、教室で自分の意見を述べる習慣がないこと、教室活動よりテストを重視することなどが挙げられた。それに対して、日本人教師は固定した教授スタイルを持ち、学習者のスタイルと適合していないことが問題とされた。

(26)の問題については、最近の中東情勢、高まる反米感情に伴い、日本がアメリカの同盟国としてイラクに派兵していることなどから、日本語学習意欲の低下や授業ボイコットによる学習進度の遅れを引き起こしていることが報告された。

7. 中東地域の特徴

7.1 宗教的な要素

「(1)授業時間が少ない」「(22)日本文化を教えることが宗教的にそぐわない」「(23)中東地域特有の学習スタイルがある」などに表れた宗教的な要素が特徴として挙げられる。中東にはイスラム教が広く普及し、この地域の文化や人々の思考に影響を与えている。また「(26)政治情勢によって対日感情の良し悪しがあり日本語学習に影響する」に表れた政治的な要素も挙げられる。イスラム教徒の反米感情が反日感情へとつながったため、これも宗教との関連があると考えられる。

これらのことは、海外で効果的に日本語教育を行うには、教師が現地の事情や文化を十分に理解することの重要性を示している。

7.2 発展途上国

エジプト人教師から「(24)日本からの協力や援助が足りない」「(25)教師派遣機関に現場の声が届いていない」など日本の援助を強く求める姿勢が見られた。発展途上国では、独力で訪日し教材を入手する機会の少ない現地人教師に、日本からの支援を期

待する傾向があるようだ。

8. 課題への取り組み

8.1 一地域の問題を広く他の地域で共有

環境の似ている地域から外の世界へと問題意識を共有することができれば、解決策が考案されることが期待できる。教師が自らの状況について気軽に相談しあう環境や情報交換の場、ネットワークの形成が重要だと考えられる。

8.2 教師の未熟さによる問題点

「困難」の項目には教師の未熟さによる問題点も多く含まれている。日本人教師がセミナー会場で、所属する機関や現地人教師、学生に対して不満や苦情を言い合う様子が観察された。自分の状況を理解してもらいストレス解消、他者との連帯から安心感を得るなど心理面での作用があると考えられる。孤立しがちな地域の教師たちがセミナーに集まることは、このような意義もあるのではないだろうか。

海外で、特に日本語教育の盛んでない地域においては経験の浅い教師が多いのは避けられない現状である。しかしながら、ここにも個々の教師の成長へとつながる可能性を見出すことができるのではないだろうか。

9. おわりに

ここに挙げられた「困難」を鑑みると、中東地域の教師には、日本語学的な知識や指導方法についての研修より、異文化理解に関する内容が必要とされているのではないかと思われる。今後は海外の地域セミナーのあり方についても考えていきたい。

注

1. 中東とは、東はイランから西はエジプトまで、北はトルコから南はアラビア半島南端までの地域を指す。一般にはモロッコなどアフリカ北部も含める（『世界年鑑』2003）。2003年現在、中東地域には23か国ある。
2. 常勤雇用されるには博士号が必要な大学が多いため、現地人教師の多くは収入や地位が不安定な状態にある。
3. (a)～(e)の分類項目のうち最も高い項目の数値を用いた。